慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	茶道(高橋龍雄著, 大岡山書店發行)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1930
Jtitle	史学 Vol.9, No.1 (1930. 3) ,p.166- 167
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19300300-0167

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

の飜刻を翹望してをつた。今大岡山書店の手によつてその一部常陸風土記が重刻された。附圖あり、讀み下しあり、索引あり、風土記研究者にとり、便利此上もない。殊に出雲國風土記考證の著者として知られる後藤藏四郎氏が補註されてゐるのも讀者を裨益する。たゞし風土記の難解さはまだ〳〵同氏の註釋によつて解決しつくされてゐない。將來國文學研究に從事せられる人々の一層の努力を期待する。

なほ本書について欲をいへば今少し活字を大くし、また風土記全部の復刻をしていたゞきたかつた。現在では本書を購入すると共になほ標註古風土記の初版を求める必要があるのは遺憾である。吾人は、書店の續いて續編を刊行せられんことを切望する。同書店が毎度かゝる非營利的の書を出版せられる努力は感謝に堪えぬ所である。（松本信廣）

茶道（高橋龍雄著 大岡山書店發行）

茶道の我が國文化史上重要なる地位にある事は今更ら記す迄も無い。この茶道並に茶道史の權威たる高橋龍雄教授の近著「茶道」は國史及び茶書、記錄類を弘く渉獵して、我が國文化史の立場より、この道を明解に略述せられたもので、最近に於て余の興味覺えて通讀したもの一である。內容の大綱を揭げると。

總說—茶の歷史—茶道の成立—英雄の茶—茶會—懷石—茶室と茶庭—掛物—花入—茶入—茶碗—拜見を請ふ茶器—茶人系譜及び流派—結論

余は本書に據りて種々教示を得たが、就中「英雄の茶」中左の記事は感激を以て再讀した。

明智光春も、その最期に臨んで、名物茶器を槍の先に附けて秀吉軍に渡したのだ、戰國の武將も、名器を尊重することは、決して忘れなかつたのである。

右の名物茶器は、今日水戸公爵家に傳存の「新田肩衝」等のことであらうが、この光春の精神は我が武士道の一面で、荒魂に對する和魂とでも稱すべきものであらう。これに就て思ひ出す事は、既に御承知かも知れぬが、かの函館戰爭中、五稜郭內に籠城の榎本武揚は、防戰の力盡き、其の落城の旦夕に迫るを覺悟し、曾て自分が遠く和蘭に留學の節、其の恩師 Theódore Ortolan より受業の節親しく贈られた寫本 International regeles en dipromatie der Zee 二册（當時萬國海律全書と約され、航海法に關する唯一參考書であつた。）の落城と共に失はれるは、國家の爲に忍びないとて態々使者を以て同書を官軍の陣中に贈り其の由來を附して保存を請うた。官軍の將黑田淸隆も其の意を喜び、其の謝禮として淸酒一樽を陣中見舞として贈つた。後幾星霜を經て、武揚が廟堂にありし日、會々同書を官庫の一隅に發見し、懷舊の情禁じ難く、遂に官許を得て再び愛藏する事となつた。武揚沒後、同書は其の子孫武英氏より前記の由來を附して帝室に獻上せられた。筆者が幸に同書を一見し其の由來を知つて武揚の精神に感激した。今、高橋教授の著書によりて更に光春の逸事を教へられ、彼此合せて、其の武士的精神には滿腔の敬意を表せざるを得ない。

最後に、本書を江湖に推奬すると共に、著者に對して深謝の意を表する。（武田勝藏）

薩道先生景仰錄（新村出著 ぐろりあ・そさえて刊）

木下杢太郎と太田正雄氏は、「日葡交通」第一輯に一耶蘇會年報の飜譯を寄せ、その劈頭を次の言葉で始められた。

今や我々は、仲介者の手を經ることなく、直接原本（乃至それに最も近いもの）から、日本に於ける吉利支丹宗門の歷史を聽く時代に達した。

誠に宜なりと云はま欲しきことではある。兎に角、日本に於ける吉利支丹史研究の盛なる、今日の如きに至つた源をたづねると、薩道先生（Sir Ernest Mason Satow）の功績に俟つもの甚だ多いことは、誰人も異論のないことであらう。名著「耶蘇會刊行書目」The Jesuite Mission Press in Japan 159-1610. 1888. 以下「日本アジア協會報告」Transactions of the Asiatic Society of Japan に寄せられた幾多の論文は、この道をたどる人々にとつて實にパンであり葡萄酒である。

その薩道先生は昨年夏、八十六歲の高齡を以て、英京ロンドンの遙か西南に方る Devon 州の Ottery St. Mary に逝かれた。本書は、本邦に於ける南蠻・吉利支丹史の權威新村出博士の卿に對する景仰錄であり追慕誌である。そして何時の間にか日本に於ける「吉利支丹研究史回顧」になつてゐる。興味深いことには薩道先生を景仰して、綿々、先生の功をたゝえてゐられる新村氏が遂に薩道卿に面晤の機會を得られず、一橋家から慶喜公に扈從して德川の宗家に行き御小姓頭取をされてゐたといふ新村氏の養父君が薩道卿を親しく見られたといふことである。

本書は、四六判僅かに五十七頁の小本ではあるが、本の美しさにかけては神經の行きとゞくぐろりや・そさえての刊行物であるから、小さい乍ら裝幀、印刷に心が用ひられ、洒落れた親しい本である。

最後に薩道先生の日本に於ける自叙傳の一部たる「日本に於けの一外交官」A Diplomat in Japan は、嘗て畏友今宮新氏が飜譯を企てられ、その一部の朗讀を聞いたことがあつたが、氏が是非ともこれを完成せらんことを衷心から希望するものである。

又薩道先生が日本語に長じ、すら〳〵草書で手紙を書かれたことや、その凸版刷りは雜誌「反響」（第一卷第四號）や、昨年、何月か石田幹之助氏が東京日々新聞に回顧談を寄せられた時、同時に掲載せられたものを見て、その巧みさに驚いたが、それから二三日して日々新聞に載せられたエルネスト・サトー署名の日本文の書翰がサトーの自筆に非ずして代筆なる由を報ぜられた。その訂正の出所は分らなかつたが、諸方にあるらしいサトー卿自筆の日本の書翰は果してどれか自筆であり、どれが代筆であるか知りたいものである。（吉田小五郎）